



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	環境と観光：市民活動としての環境保全とフットパス
Author(s)	小川， 巖； 下休場， 千秋
Citation	CATS 叢書， 14， 1-49
Issue Date	2021-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/81463
Type	departmental bulletin paper
File Information	CATS14_color_Part1.pdf



第 1 回 環境と観光

——市民活動としての環境保全とフットパス

小川 巖

エコ・ネットワーク 代表

下休場 千秋

北海道大学観光学高等研究センター 特任教授

1. はじめに

（下休場千秋） 皆様、観光現場の挑戦をテーマとする 2020 年度の公開講座にご参加いただきありがとうございます。これから第 1 回公開講座を開始いたします。本日のゲスト講師の小川巖様をご紹介したいと思います。

小川様は札幌を拠点に 30 年近く活動されてきたエコ・ネットワークという市民環境団体の代表をされています。これから約 1 時間、「環境と観光、市民活動としての環境保全とフットパス」というテーマでお話をしていただき、後半約 20 分対談形式でさらに深く掘り下げたお話をお伺いいたします。

遅れましたが、私は本日の担当教員、観光学高等研究センターの下休場と申します。よろしく願いいたします。それでは、小川様、よろしく願いいたします。

2. 環境と観光——市民活動としての環境保全とフットパス

2-1. エコ・ネットワークの活動紹介

（小川巖） ただ今ご紹介いただきましたエコ・ネットワーク、小川巖です。今回、「環境と観光」という非常に大きなテーマをいただいて、ちょっと戸惑ったんですけど、主催者である北海道大学観光学高等研究センターの下休場先生から、エコ・ネットワーク設立の経緯とか、活動内容、そういったことについてもぜひ話してほしいということでしたので、私らがこれまでやってきたことを振り返るいい機会になると考え、その内容を今日は整理してお話したいと思います。

前半は、文字がずらずら出てきますけど、後半で関係する映像はたくさん出てきます。本題に入る前に、私自身とエコ・ネットワークの簡単な履歴についてお話をします。

私は 1945 年、北海道松前町で生まれています。ここに書いた通りで、正真正銘の道産子

なんですよ。育ったのが神奈川県横須賀市ですから、気持ちとしては何かまだ北海道人になり切っていないような、そういうところもありますけど、すでに札幌に来てから 50 年たちました。今年の 8 月、いよいよ後期高齢者にめでたく入ることができました（図 1）。

これからまた、あと何年やれるか分かりませんが、この活動を続けていくつもりです。これをぞっと見ていただくとお分かりの通り、西暦の 2000 年を越すあたりからフットパスという言葉が目立つようになってきますね。取りあえず 10 年ごとに区切って、その間に我々がどういう活動をしたのかということをかいつまんでお話ししたいと思います。

2-2. エコ・ネットワークの立ち上げ（図 2）

1992 年にエコ・ネットワークを立ち上げました。実はその前に、1984 年に設立した野生生物情報センターを 8 年やりまして、そこを 1992 年に解散して、私はエコ・ネットワークを設立しました。

エコ・ネットワークを立ち上げた当初、そんなことで飯を食っていけるのかとか、いろいろ心配する向きがありまして、友達の何人かは、さて何カ月持つかという賭けをしたそうです。その賭けは当たらず今日まで 30 年近くやってこられた。それは、私たちにそういう何か力量があったというよりは、ここに大きく書いている通り、ちょうどそのころがバブル景気の前後だったんですね。

景気もずっと上向いていまして、そういう中で、例えば資金的な面でも助かったのは確かです。それと野生生物とか自然への関心が高まってきた、そういう時期だったと思います。

それともう 1 つ忘れられないのが、アウトドアブームですね。そういう動きがこのあたりから始まったんじゃないかと。こういった要因に助けられて私たちは何とか今日までやってこられたというふうに、今にして思えば感じているわけです。

それで、一番下に書いてある通り、大きな流れとしては、野生生物情報センターはその名前の通り野生生物、それと自然、そういったものをテーマにしていました。それがエコ・ネットワークを立ち上げた時点で、環境分野にも足を踏み入れて、そちらにも活動の幅を広げたいという気持ちがあったわけですね。

そして、2000 年を越して何年かたったあたりから、フットパスというものが私らの活動の主要テーマとして浮上してきたというか、そんな感じがいたします。ではこの後は 10 年刻みで我々がやってきた主な活動を見ていきたいと思います。

2-3. 1980 年代：野生生物情報センターの時代（図 3）

ここにありますが 1980 年代、これは野生生物情報センターの時代です。それで、私らは自分たちの組織をつくった際に、一種の中間組織のような形態を取ってまして、ここに「受託組織」と書いてある通り、日本野鳥の会の札幌支部、さつぼろ野の花の会、それから野生動物写真研究会とかね、こういった会を引き受けてその運営のお手伝いをするのも業務

でした。

そして、テーマで見ていただければお分かりの通り、やはり野生生物とか植物とかそういったものが活動の主体であり、かつ主なテーマということが言えるんじゃないかと思います。一番最後にその活動を要約すると、野生生物の観察や調査とか、自然に関連したさまざまな行事。例えば、写真展とか映画会とか、そういったものを手掛けたり、いろいろなところに行って講師を務めた。そして実際に野外活動を行ってきた等、これがだいたい1980年代の我々の活動ということが言えるかと思います。

2-4. 1990年代：エコ・ネットワークの立ち上げ（図4）

次が、エコ・ネットワークが立ち上がった1990年代ということになります。受託組織としては、ヒグマの会、これも今も続いて、確か去年設立40年を迎えました。それから野生動物救護研究会、こういう組織の事務局を私らがお手伝いしておりました。

テーマを見ていただくと、野生生物情報センター自体のテーマをいくつか引き継いだ形のものも当然あります。それと、少し状況が変わってきたのは、赤で示した、例えば「ワンデイウォーク」、それから「ナショナルトラスト&ピーターラビットツアー」という、これはイギリスの湖水地方へ行くツアーなんですね。

このときに、向こうのフットパスに出合ったというかな。実際にそこを歩いて、ああ、これはやはり北海道でもやれないもんだろかというようなことを考えた、そういうきっかけになったわけですね。

それから、「かんじきウォーク」というのは、これからの時期雪が降りますと、外を歩くというのはちょっと難しくなるので、それだったらかんじきを履いて歩く活動。黒松内に住んでおられた渋谷吉尾さんという名物おじさんがかんじきを何千足も作った方です。その方から少しずつかんじきを分けていただいて、冬を楽しむということをやった。これは今も人気の行事として定着しております。

それから「エコ・ウォーキング」というのは、北海道新聞の子会社である道新文化センターが歩く野外講座をやりたいという話を持ってこられた時に、じゃあ、エコ・ウォーキングという名前でやりましょうということで。春と秋にやるわけですが、各5回です。春なら春で5回。火曜日なら火曜日に5回やりました。

それからその次にだんだん参加者が増えてきましたので、では週に2回、火曜日と金曜日にもやろうと。それから今度は、土曜日もやろうということで、週3回、5回ずつ。ですから春と秋に各15回、多いときには1回50人ぐらい来ましたから、相当な数になるわけですね。

これは現在も続いております。人気講座として定着しております、これが後になってフットパスと呼ぶようになったんですが、そういう行事をやる際の人的資源になったんじゃないかなというふうに思っています。

このあたり、新しい組織をつくったわけですから、自然体験から少し幅を広げて環境体

験という方向にいくようになりました。それと今度は、自然とか環境系の団体と連携して行うということですね。つまり、自分たちだけで完結するんじゃなくて、その周辺にいる人たちが団体と手を組んでやると、そういう方向にかじを切っていったわけです。

2-5. 2000年代：フットパス・ウォーキングの時代（図5）

そしてさまざまなプログラムをこちらで考えて、それを実践するというようなことをやってきたわけです。今度は2000年代です。この辺になると本当にフットパス系の行事が軒並み出てきます。札幌市内でフットパスウォーク、これはもうおそらく何十回、1年間にやっていたと思います。それ以外にも国内で3日ないし4日のツアーとして10回や15回ぐらいやっているんじゃないですか。そんな感じです。

それとは別に今度は海外にもということで、特にイギリスはフットパスの本場、発祥地ですから、そこを中心にフランスとかスペインとか、そういうところにも足を伸ばしております。それと同時に今度はフォーラムを仕掛けるようになりました。

そして今度は、フットパスをやっている各団体に呼び掛けて、全道フットパス・ネットワーク準備会を立ち上げました。最初から正式な組織がなかなかできないだろうということで、取りあえず準備会として発足しました。合わせて、持ち回りで道内各地、全道フットパスの集いというのを行ってきまして、もう30回近くになっているんじゃないですか。年2回のペースでやっております。

それとまた、「エコ・ウォーキング」ですね。先ほどもお話ししました、それは現在も、この2000年代になっても続けております。そして、テーマを要約してみますと、海外に行く、これはフットパスだけでなく、環境研修というような形で、デンマーク、イギリス、そのあたりに足を伸ばしたんですね。5〜6回は行っているはずです。

2-6. 2010年代：フットパス・ツアーの海外展開と長距離化（図6）

フットパスは、今度は、ワンパターンではなくていろいろなタイプのフットパスを進めるというようなことをやってきました。2010年代になると、さらにそれが膨らんできたといえますか、その中で最初に挙げた「済州島オルレ」。オルレというのは、済州島の方言で細い道、裏道というような感じかな、そういう意味ですけど、この島には1周する450キロぐらいのオルレができていまして、それを10年かけて全部歩きました。

なかなか魅力的なところですし、それからこれを本当に数年の間に作ってしまったというパワフルなおばさま（ヨ・ミンスクさん）がいまして、最近その方の評伝のようなものを読んだんですけど、すごいパワーだと思います。そういうことで、島を1周するオルレというフットパスですね。それができて、これはコロナ騒ぎがなければ今年も行きたいところなんですけど、収まったらまたぜひ再開したいと思っています。

それ以外にも台湾とかヨーロッパにも行っています。そして下から3行目にあります「株式会社ジオ」を立ち上げまして、これは旅行会社です。私の息子が立ち上げた会社で、我々

がフットパスを、あるいは環境体験ツアーを私達が人集めをしたのをツアーの形にしてもらうわけですね。そういう関係でやっております。

「さっぽろラウンドウォーク」のラウンドウォークというのはフットパスの長い、ロングパスとでも言ったらいいでしょうか。そういった研究会を北大が中心になって立ち上げて、私達も加わっています。札幌市とか観光協会とかそういうところが一緒になって作ったものです。これについては「フットパスの長距離化と周回化」と共に後でお話しします。そしてフォーラムを「札幌にもフットパスを！」という名称でやっております。この後になるとフットパスが本格展開する形になりましたし、それと平行して環境ボランティア等、いろいろなを手掛けてきました。それと同時に今度は我々が海外へ行くだけでなく、環境の専門家、そういった方を海外からお呼びするというようなことも何回かやってきました。

2-7. 2020年代：フットパスの新しい展開（図7）

それで今度は2020年代というのは、この2〜3年のことだと思って下さい。それからこれから先のことになりますが、2行目に「防災フットパス」、それから「廃線フットパス」と出てきます。これについても後ほど少しまとめてお話ししたいなと。

ということで、フットパスを長距離化、周回化することと同時に、私自身の中で二本柱にしている環境ボランティア、これをもっと多様な形で展開していきたいと。テーマだけでなく、人々とのつながりも含めて、あるいは行政とのかかわりも含めて、多様化していきたいと思っています。

2-8. エコ・ネットワークのポリシー（図8）

10年刻みでざっと流れを見てきまして、私たちのポリシーと言ったらちょっと大げさですけど、エコ・ネットワークというのは、極めてユニークと自分で言うのも変ですけど、言ってみればいい加減な組織なんじゃないかなと思っています。

まず、会員制は採っておりません。これは野生生物情報センターの時代からそういう方針で来ています。会員制を取りますと、会員同士の結束が非常に強まる、そういうよさはあるんですけど、会員でない方がなかなか近づけない、入ってこれないというような状況がどうしても生まれてしまう。それをなくすために会員制にはしていないことを貫いています。市民が道民がすべて会員だと思えばいいのですから。

今エコ・ネットワークには、エコ友クラブというグループを立ち上げていますけど、これは歩く人のための組織であって、エコ・ネットワークの会員ではないですね。よく間違えられますけど。それと、よくNPOじゃないのかとか、NPOを取得しないのか、などと聞かれますけど、私は非NPOと言っております。

一時は海外のこともやっていますからNGOなんて偉そうに言っていましたけど、今はもう自信を持って非NPOと言っています。なぜかという、NPOにいくつか関わって

いるのがあるんですが、そういうのを見ていると、やはりかなり金銭的な面だけでなく運営する意味でも、事業計画を立てて予算を立てなきゃいけないなど形式を整えるの
に大変手間がかかるということがあるんですね。

ですから、例えば年度計画を立てちゃうと、来年に向けてはいいでしょうけど、今日
飛び込んできてテーマに対応できるのかというようなことがどうしても出てきます。そう
いう面倒くささを一切なくして、即応性を第一に考えてのことで。

それが、例えば極端なことを言えば、突然とんでもない問題が起きたといったときに、
それにいち早くうちがコミットするということができるよさがあるわけですね。何のこ
とはない、私たちはそういう年度計画というのは作っていませんから、出てきたテーマ、我々
ができるものであればすぐにそれに飛び付くということですね。

ですから計画だとか予算には縛られない。こんな組織はたぶんないと思うんですよ。
それは私のいい加減な性格が反映していると思うんですけどね。それで今日まで何とかな
っているからちょっと不思議と言えば不思議だとよく言われるんですけど。その代わり、
ほかの団体との連携、場合によっては後押しをする、そういうものに徹するということを
我々の方針としてやってきています。

あとは行政に頼らない。というか頼りたくない。というのは、我々の動きと行政とはど
うもやっぱりかみ合わない。私は行政に6年弱ですけどいた経験から、それを今は肌身で
感じているわけですね。これについては、今から8年前に亡くなられた植物学者の辻井達
一先生、この方が、私らが1992年にエコ・ネットワークを立ち上げるということを報告に
行きましたら「そうだね、巖（ガン）さんたちがやっているのは奇兵隊だもんね、だから
せいぜいゲリラ的にやってそれに徹したらいいよ」というようなことを言われまして。こ
れは本当に僕は褒め言葉だと今でも思っています。

ミッションなんて言っていますが、今までここで言ってきたようなことを文章にする
とこんなことになるんじゃないかということですね。そのためにこんなことをやりますよ
というわけですが、だからといって、何かを実施するのに来年はこれをやる、再来年は、
そういったような縛りはほとんどありません。ただ、そうは言っても、こういうことを今
年早急にやろうとか、それは来年も続けてやりましょうとか、そういうことは当然決めて
いくわけですね（図9）。

一番最後に書籍の展示販売、それだけじゃなくて出版も結構やっております。ここで
お見せできないんですが。書籍をなぜ扱うようになったのかというと、やっぱり日銭を稼ぐ
必要があるということで、本を売ればなにがしかのお金が入るわけですから、そういうこ
とで始めたわけですね。今ブックショップという形でエコ・ネットワークの中にあるわけ
ですけど、野生生物とか自然系に絞った書籍をそろえているというのは、全道どころか
全国でも珍しいんじゃないかなと思っています（図10）。

2-9. フットパスの対象と分野 (図 11)

じゃあ、いよいよここで、私らの中心テーマ、重要テーマの1つであるフットパスの対象と分野を見てみますと、例えば対象でいえば歴史、文化、自然、それから農。「農」というのは「農業」の「農」ということになりますけれども。それから食ですね。食べ物。食べること。そういったことが対象になるわけです。

そして、分野としてここに挙げた 7K。アルファベットの K とフットパスが非常に相性がいいんだというのに気付いて、ここに羅列してみました。環境の K がありますし、次が健康、それから観光が出ていますね。交流、経済、景観、活性化と。こじつけではなく、こういったものとフットパスが密接につながっている。

ある1つのコースを考えたときに、7K 全部というんじゃなくて、あるコースについては環境かもしれない、別のコースについては観光面で意味がある、そういうコースかもしれない、というように、あるいは複数にまたがる。3つになるかもしれない。そういうようなつながりが出てくる。これがフットパスの優れた点でしょうし、ハイキングコースとはそこが違うのです。

2-10. フットパスと地域活性化 (図 12)

フットパスというのは、歩くわけですから、もちろんスローです。それからシンプルです。時間が当然かかるわけですから、滞在時間の大幅な延長ができる。よく観光の世界で長期滞在なんていう言い方をよくしますが、フットパスこそそういう長期滞在、長期というよりは中期滞在でもいいんですけど、そういう可能性があるんだというふうな思うわけです。

地域の食、食産物というのかな、食と生産物との出会い。長くその土地に滞在するわけですから、あるいは地元の人たちとの交流が促進されたり生まれるということがあると思うんです。

観光の世界では入り込み数、札幌の雪まつりには 200 万人来たとか、我が町の観光地には 1 日当たり何百人来たとか、温泉には 1 日当たり何人来たとか、そういう評価の仕方をすると思うんです。それに対してフットパスは、「人・時間」で評価すると。これがふさわしいんじゃないかなと思うわけです。

つまり、その点では観光目的のフットパスであっても、フットパスの評価というのは何人・時間というもので評価するようにした方がいいんじゃないかなと。その方が価値が明瞭になってくると思います。

例えば、ある観光地に 1 日当たり 1,000 人訪れたとします。そこに 1 時間いれば $1,000 \times 1$ ですから 1,000 人・時間という、そういう数字が得られます。その点フットパスですと、50 人。フットパスで 50 人といえばそんな無理な数字ではないと思うんですね。それで歩いて 5 時間。 $50 \times 5 = 250$ で、250 人・時間という数字が得られます。

次に 20 時間とすると、1 泊なので寝ている時間もありますから、それは取りあえず置い

ておいて、そうするともう 50 人が 1,000 人・時間。この数字は 1,000 人が 1 時間観光地を訪れる数字と同じになってしまう。これは魔法でも何でもありませんね。

私がこういう人・時間というのを考えたのは 30 年ぐらい前だったと思うんですよ。それで多少悦に入りまして、自分が考えたこういう単位になったということですね。ところが前問孝則という、僕が好きな作家が書いた文庫本（ジェットエンジンに憑りつかれた男）の中にこの人・時間が出てくるんですね。

それはどうなのかというと、戦時中にやたらめったら学徒動員とか学校の生徒を集めて飛行機工場で働かすわけです。ところが当時、今でいう工程管理という発想などない時代で、じゃあ、何人、何時間で 1 機のゼロ戦ができるのかということを考えた技術者の方がおりまして、そしたら 1 万 5,000 人・時間だとそこで出てきたんですよ。

僕のオリジナルだと思っていたんだけど、もうすでに今から 75 年以上前にそういうことを考えた人がいたんだなと。でもやっぱりそういうふうに使われるわけですから、非常に意味のある単位だなと思っています。

2-11. フットパスのこれから (図 13)

フットパスのこれからを考えると、1 つの市町村の中に 1 本または数本のフットパスを作ってきたわけですけど、そこだけだったらハイキングコースと変わらないと最近よく思うんですよ。だから、そこからもっと突き出ないといけないと思うんです。それはいろいろな展開が可能なはずです。

1 つは、周回ですね。サーキュラーフットパス。これは先ほどもちょっと出てきましたけど、さっぽろラウンドウォーク、これは開設が間近ということで、来年か再来年か分かりますが打ち上げるはずです。札幌の周辺をぐるっと回る周回でフットパスをつくりますと、120 キロから 150 キロぐらいになる。

コースの取り方によって距離は変わるわけです。そういうものができたら、どうでしょうか、地元の人だけでなく、観光に訪れた人、あるいはそういうフットパス歩きを楽しむ人が、1 回じゃ歩ききれないですよ。20 キロ歩いたとしても 1 週間ぐらいということになりますよ。

そうするとさっきの人・時間でいったらすごい数字になってくるわけです。そういう期待ができるわけです。実際、もうすでに京都では京都一周トレイルというのができているんです。東山から北山の方。それから嵐山のある西山の方ですね。そこを馬蹄型のようにぐるっと囲む、130 キロぐらいのコースがあるんです。

実は僕らは京都一周トレイルに行く予定になっていたんです。ですけれども、札幌発のツアーも控えろということになって取りやめになっていますけど、僕らは去年もう行っていて、なかなかいいです。

お寺とか神社の周辺は、人だかりがすごい状態ですけど、その一周トレイルの方に行くと非常に静かで、それなりに人も歩いていまして、海外の人が目立ちました。それから広

島も、広島市を中心にぐるっと取り囲む、どちらかというと山をつなげたようなコースで、これも 300 キロ近いコースです。

宮島、厳島神社のあたりもコースに入っています。ですからもう国内でも周回パスができていまして、それに続く形で札幌もそういうものを作る段階にきています。道内の他の地域でも、こういう考え方でいけばどこでもできると思うんです。

そうすれば、観光地を巡ってどこかに行ってしまう人たちが、じゃあ、そこを 1 つか 2 つコースを歩いてみよう。人間というのは面白いもので、僕らがまさに済州島でそうだったように、何コースか歩いちゃうと、では全部歩いてやろうなんていう気持ちになってくるんですね。

だから、そういう呼び込み方もできるわけですから、道内ほかの地域でも周回パスをこれからどんどん進めていきたいと思っています。それともう 1 つはロングパス。これは、隣の町とまずつながるのが始まりになるわけです。

今まで道内に 40 ぐらいの地域でフットパスをやっている地域があるわけですけど、なかなか隣の町につながらない現実があります。これは考えてみたらすぐ分けることで、自分の町がいくら盛り上がっていても隣の町に行くとまったくそうでない、全然フットパスに関心のないというようなケースがよくあるんです。

だから、それをいかに突破するか。つまり隣の町の人をその気にさせるかということから始めなくてはなりません。僕らは町から町へはもちろんなんですけど、前々から考えていたのは、稚内からサハリンに行ったらどうか。すでにサハリンで下見を済ましてきて、これは十分フットパスと言えるだけのコースがあるということを見てきました。

それから函館から青森の方に行ってもいいわけですし、ボーダーツーリズムという言葉も最近あるようですが、そういうスケールでロングパスがつながっていけばいいかなと思っています。

それから札幌から各方面、例えば小樽やニセコ、新千歳空港、それから石狩、石狩のずっと奥の浜益の方まで歩くロングパスウォークは何年も前から実施しています。

2-12. 新たなフットパスの創出

あと、一番最後の「新たなフットパスの創出」。これは先ほど 2020 年のところでちょっと話しましたが、フットパスをこれからどう展開するかといったときに、こんな形のフットパスもやれるんじゃないかということで挙げました。ひとつは「防災フットパス」です。「防災フットパス」と言ってもいいかもしれない。

2 年前でしたかな、宮城県石巻市の大川小学校がありますね。84 人の子供たちと先生が津波で亡くなった。あそこを実際に見てきたんですよ。ぜひ向こうを歩きに行ったときに足を伸ばそうと思い行ってきました。

そうしましたら、学校のすぐ 50 メートルぐらい先に山が迫っていて、山腹には子供たちがそこで何か作物を作る農園みたいのがあるんですね。にもかかわらずそちらに逃げない

で、わざわざ河口に近い方に行ってああいう悲劇を生んでしまったわけです。

ですから地元の人もそうですし、学校の先生、子供たちも含めて日ごろから歩ける、そういう道があって、これを避災フットパスというふうに呼んだらどうかと思うんです。そういうものがあれば気楽に逃げ込めたんじゃないかと。長い距離である必要はない。それはゆくゆく考えていけばいいですから。

北海道でいえば例えば日高地方は津波の時にかなり被害が想定されるエリアですね。海岸にかなり丘陵が迫っている地域にこういうフットパスを作っていくこともこれから視野に入れていきたいなと思います。

それから「廃線フットパス」。これは今北海道でもあちこちでJRが廃線になっているだけでなく、すでに廃線になったところがいくつもあります。そのほとんどそのまま放置されて、荒れ放題になっているわけです。でもそういうところをフットパスとして活用したら、個性的なフットパスができるはずですよ。

初めからフットパスとしての再生が無理ならば、当面はサイクリングロードでもいいんじゃないかなと思うんです。サイクリングロードであれば、そこを人が歩いてもいいわけですからね。そういう意味でサイクリングとフットパスとの共生とでもいいですか、そういうことが図れたらいいなと。

最後に書いた「お散歩フットパス」。お散歩フットパスとは言っていないけど、それらしいものは各地にあると思います。町中に、あるいは町の外れを問わず、散歩に行きやすいところに、1キロ、2キロ程度の近くて短いフットパスを設けて、そこを歩く。フットパスと名付けることで、フットパスの知名度を上げるということも目的の1つになります。

散歩やウォーキングしている人はたくさんいますので、そういう人たちをいかにフットパスに引き入れるかということも考えていったらいいんじゃないかなと。我々はどうしても、観光もそうですけど、よそから来た人をいかに楽しませるかということを考えがちですけど、お散歩フットパスであれば地元の人を中心にすることで、地元の人と外から来た人たちが一緒に歩けるようになればもっといいわけです。そんなようなこともこれから考えていけたらいいなと、そんなふうに思います。

2-13. 環境ボランティアとフットパスの多様な活動事例

この辺から話だけじゃあれなので、我々がやってきた二本柱の1つ、環境ボランティアについての話題に移ります。フットパスになります。えりも町でシカの角拾いのボランティア活動を10年ぐらいいやりました。どういうことかという、えりも町の町営牧野は1,000ヘクタールほどある非常に広い牧野ですが、牛の放牧はやっていません。

そこにいまやシカが100頭、200頭って入り込んで、言ってみれば養鹿場のような状態になってしまっている。そうすると、これは雄のシカですけど、だいたい4月の初めあたりから、角を落とすんです。毎年角は再生するんですね。

ところが放牧はやめたんですけど、牧草が育ってますからそこをトラクターを入れて草

刈りを入れるわけです。そうすると、この角がトラクターのタイヤに刺さってバーストしてしまう例が年に何件か起きてしまいます。

山の中で、トラックがバーストしてしまったらさあどうなるか。それを引っ張り出すのも一苦労ですし、修理にも時間がかかる。その間に刈った草が雨に当たったりすると台なしになってしまう。そういうことを地元の酪農家の人たちから聞いたもんですから、そこでひらめて、じゃあ、それを環境ボランティアとしてやらせてくれないかということで 10 年程前から始めたんですね。

だいたい多い年には 100 人ぐらい申し込みがあるわけです。面白いことに、本州、東京あたりからも申し込みが、どこで聞いたのか知りませんが、来るんですね。だけど広い牧場の中にみんなばらばらになって歩いて迷子にでもなったら大変ですから、目の行き届かないところまで行っては困るので、だいたい 25 人、最大でも 30 人が限度なんですね。

そうやって集めた角を地面に並べて皆さんでお披露目をします。100 本以上になりますね。不思議なことに、こういう作業をやると子供が拾うんですね。多いと 10 本ぐらい拾う子がいる反面、目を皿のようにして探す大人で 1 本も見つからないという人がいたり、大変面白いです (写真 1)。

でも事前に酪農家の人が拾って取っておいてくれますので、皆さんにはお土産として持ち帰ってもらうことができるわけです。1 泊 2 日でやるイベントで 2 日目には拾った角を使って角細工をやっています (写真 2)。

だからこれは環境ボランティアと言っていいのか観光と言っていいのか、そのちょうど境界領域のような、それを私は「環境体験」と言っていますけどね、そんな感じになっております。ところが、最近襟裳岬のその牧野にどうも風力発電用の風車が建つということで、土地を貸したのか、買収されたのかということで、去年、今年とできませんでした。また何とか再開したいな思っています (写真 3)。

次は同じ日高管内の平取町に広がる 15 ヘクタールのスズランの群生地では昔、馬を飼っていた町営牧場だったんですね。今は飼っていません。なぜかというところでよくクマが出て馬が被害に遭うもんですから止めてしまったのです。6 月上旬にはそこにスズランがもう一面咲き誇り見事なもんです (写真 4)。

夏には 1 メートルを超す侵入雑草に被われてしまいます。今まではその時期に草刈りをしていたのですが、色々試したところ開花前に侵入雑草を抜き取るのが一番効果的だと分かりました。でするのでその時期に環境ボランティアとして作業をしています。最近では地元の方も積極的に参加してくれるようになりました (写真 5・6)。

これは札幌市内の盤溪に 6 ヘクタールほどの土地がありまして、これは社会福祉法人が所有している森林なんです。そこを法人の子供たちが野外作業する場として運営されているんですが、その周りが森林になっていますから、森林の中にそういう子供たちでも歩ける道を造ってくれということで、その作業を続けています。ササ刈りだけでなく、ちょっとした土木工事並みの作業になります。障害者も歩けるフットパスということで多分、来

年完成すると思います。2キロくらいのコースです（写真7・8）。

これも札幌市内です。南区によくクマが出るというので、一去年の8月大騒ぎになりました。サクランボを目当てに実のなる7月の初めあたりにクマがこの木に付くわけですね。1カ所に5〜6頭ぐらい来てサクランボを夢中になって食べていく。こういうほったらかしにされた果樹園の木を切ろうというプロジェクトが今年から始まっています。サクランボはチェーンソーで伐ります。何かちょっともったいない気もするんですけど（写真9・10）。

次にフットパスになります。黒松内町の例でお話しします。フットパスを歩いてトワ・ヴェールという、ここでソーセージとかハムなどを作るところなのですが、レストランも併設されています。ここではまさに地元の産物で作ったものを食べることにしています。つまり歩いて汗を流して終わりじゃなくて、地元で作られたランチなりを食べると、あるいはお土産に持ってかえるというようなことを我々は努めてやるようにしております（写真11・12・13・14・15・16）。

これは白老町のウポポイのある白老駅からもう1つ先の萩野という小さな駅があります。その近く流れるウヨロ川は川岸を歩くだけで、そのすぐ下にサケがパチャパチャするのを見ることができます。このコースも私らが10年ぐらいの間にできたコースで地元の人たちと一緒に開発したことになります（写真17）。

そうしましたら数年後、今度は大型バスが2台も3台も乗り付けるようになって、一時ここがすごいスポットになったんです。ところが大雨が降るたびに川の状態が変わってしまっていて、サケが集まる場所も変わってしまうんです。この間久しぶりに行ってきましたら、それでも結構見ることができて大変喜ばれました。

小樽というやつぱり運河とか、ごく限られた地域に人が集まって、端から見ると小樽は運河しかないみたいに見えちゃうんですが、そうではなくて、小樽はちょっと山が迫っているだけあっていい歩くコースがたくさんあります。そのうちのひとつが水族館のある赤岩の方からオタモイに至る7〜8キロは本当にいいコースです（写真18・19）。

海側は断崖になっています。赤岩山から奥にうつすら積丹半島が見えます。こういう海岸線がなかなか見事で、結構霧が出てきたりして幻想的な景色も見ることができるかも知れません（写真20）。

次は上富良野です。あそこはコースが10本か11本あって田園地帯を歩くというので、十勝岳が前面にぱっと広がっているという、そういう景観のところを歩くわけです（写真21）。

十勝の新得町の例に移ります。狩勝峠に向かうかつてここに国鉄の線路がありまして、通称狩勝線と言っていました。その廃線になった後を今フットパスとして使っているわけです。これを始めたのが、新得町に住んで、もう亡くなりましたけど、竹田英一さんという方が狩勝線の跡地をフットパスにしました。これは北海道どころか全国的にもトップランナーだと思います。1990年にフットパスを考えて実践している人がいたんです（写真22）。

ここは同じ新得町で共働学舎という施設があります。宮嶋学さんという方がオーナーで

す。知恵遅れの人たちを使ってチーズを作っているところです。せっかくそこへ行くんだから宮嶋さんのところへ寄ったことがあります。彼はまじめですから初めは「アルコールはだめよ」なんて言っていたんですけど、ビールとグラスを用意してくださいまして、非常においしいチーズで盛り上がったことがあります（写真 23）。

これはニセコの神仙沼の方だと思います。ニセコ町も今フットパスに相当力を入れてやりまして。これは高原フットパスと名付けて、下の田園地帯を歩くだけでなく高原の方も歩けるようにするなど、山の方も含めたフットパスにしたらもっとバラエティーがあって面白いんじゃないかと、そんなふうにしけかけたりしています（写真 24・25）。

イギリスの例です。フットパスの標識が至る所にあります。コーンウォール半島はブリテン島南西部に伸びる細長い半島です。英国で一番長いフットパスで 1000 キロぐらいのサウスウエストコースタルパスがあります。こういう採草地とか牧場の中を歩くのが多いんです。ほとんど私有地です（写真 26・27・28）。

済州島のオルレについても海岸線をずっと巡り、ひと区間 20 コース以上から成っています。だいたい 15 キロから 20 キロになっています。コースサインは完璧で迷う心配はまずありません（写真 29・30・31・32・33）。

最後に今、周回のさっぽろラウンドウォークというような周回パスを進めているところですが、かつて 40 年ぐらい前に、札幌周辺自然歩道というのを札幌市が作った時期がありまして、ラウンドコースの一部になっています（写真 34・35・36）。

今まで私の言葉の中であんまり観光という言葉が出てこなかったんじゃないかと思います。当初、私達の活動は観光という意識はまったくなかったんです。ですけどフットパスを始めてから、やはり観光との接点のはっきりしてきました。その辺りについては後程詳しくお話するつもりです。

2-14. まとめ——私にとっての観光とは（図 14）

環境体験の中で代表的な活動のひとつがフットパスで、もうひとつが環境ボランティアだと改めて説明するまでもないでしょう。このふたつ観光と結び付けることも可能ではないかと思うようになりました。

つまり、先ほどお話しました襟裳岬のシカ角拾いのボランティアの場合は、まさに自発的に来てもらっています。今、実際に津波があったとか、それから洪水があったといえ、全国からボランティアがたくさん集まります。それは皆さん各自の意思で行っているんですけど、そういうことがもう今日では当たり前に行われているわけですからね、フットパスにしても環境ボランティアにしても、何か観光的なアプローチでもって進めていくことができるんじゃないか。そういうことで僕らがやってきたことが新しい展開につながっていくんじゃないかなと、そんなふうに思っています。悪い声で聞きづらかったかもしれませんが、私のお話は以上です。

（下休場千秋） 小川様、大変、興味深いお話をありがとうございました。

3. 補足説明

(下休場千秋) このお話をお聴きしまして、エコ・ネットワークという非常にユニークな環境保全活動をされていて、フットパスという観光との接点の活動もされている、取り組んでおられるということで、あらためて北海道の魅力とか写真を見ると、皆さん方も北海道を歩いてみたいと思われる方がたくさんおられるんじゃないかと思います。

ここで対談に入りたいんですが、その前に私と小川様との出会いを少しお話ししたいと思います。私は、2016年、5年前に大阪から札幌へ引っ越してきました、北大の正門近くにはエコ・ネットワークの事務所がありまして、そこにお伺いしました。

フットパスをやっておられるということで、エコ・ネットワークのエコ友クラブの会員にもならせていただきまして、道内各地であるとか、済州島オルレ等を会員の皆様と一緒に歩かせていただきました。それがきっかけとして現在に至っております。

3-1. 環境体験と観光

その後2017年から、観光学高等研究センターの研究会を始めたんですが、そこにも小川様とかご子息の皆様にも参加していただいて、これまで研究会を開催してきました。そのあたりを5〜6枚のスライドを使って少し補足の説明をさせていただきたいと思います。

それで、今スライドに出したんですが、先ほどの小川様の最後のスライドのところに環境体験という言葉が出てきました。非常に多様な環境体験というものをこれまで30年以上にわたってされてきているんですが、それを観光とどういうふうに結び付けたいのかということを考えていると思います(図15)。

観光のことを考える場合に、ホスト、ゲストという関係が必ず出てくるんですが、ホストというのは地域住民であり、生活をされている方々です。ホストの立場の方が環境体験をすることによって、1つはふるさと意識とかふるさとへの愛着心が醸成されるんじゃないかと思います。要するに、地域を愛する心が環境体験をすることによって生まれるということが言えるんじゃないかと思います。

ゲスト、要するに観光客であるとか消費者としてその地域を訪れる方もいます。先ほどの小川様の話でありましたようなさまざまな環境体験をすることによって、ただ単に土産物を買ったり、ショッピングをしたりという、モノを消費するという観光から、コトを消費する、体験そのものを楽しむという観光というものに今大きくシフトしているわけですが、環境体験という、先ほどのお話にありましたように、さまざまな素材がありますので、それをいかにゲストの方々に提供できるのかということが、これからの観光を考える上で非常に重要ではないかなと思います。

そうしますと、ホストとゲスト、お互いに環境体験することが重要であるということなんですが、何がそうしたらホストとゲストの環境体験に結び付けるかという、私はここ

で「道草をしたくなるような歩く道づくり」という言葉を使いたいと思います。

道草というのは、目的地に急いで行くのではなくて、たまたま歩いている横に何か珍しいものがあるとか、おいしいものを売っている店があるとか、その地域の方に出会うとか、そういう急いで移動するのではなくて、移動そのものを楽しむ。さまざまな移動の中でそういう素材を体験するという、そういう道草をしたくなるような歩く道をつくっていけば、ホストとゲストが交流できるような、いわゆる歩く滞在交流型観光がこれから実現していくのではないかなと考えています。

なぜそういうふうに考えたかといいますと、北海道大学では2018年から観光創造研究会で、歩く滞在交流型観光の新展開という研究会を開きまして、オルレであるとか、フットパスであるとか、ロングトレイルであるとか、聖地巡礼であるとか、そういう歩く観光の可能性を民産官学の専門家が集まって、もちろん小川様にもメンバーに入っていていただいてこれまで研究会を開いてきました（図16）。

その結果は、歩く滞在交流型観光の新展開（CATS叢書第12号）にまとまっておりますけれども、そこではロングトレイル、信越トレイル、みちのく潮風トレイル、これは次回、来週のテーマになると思いますけれども、フットパスであるとかオルレであるとか、聖地巡礼、まち歩きなどさまざまな全国、海外の事例の研究発表をしていただきまして、これまで歩く観光の可能性を探ってきました（図17）。

3-2. 歩く滞在交流型観光の実装化に関する研究会

その延長線で、2019年から札幌市における産官学連携による歩く滞在交流型観光の実装化に関する研究会を、木村先生をはじめ仲間たちと立ち上げまして、これは市民の健康志向の高まりとか自然趣向とか旅行形態の多様化を背景に、歩くことをテーマとして札幌の観光まちづくりの実現を目指して、先ほどのお話にありましたように、札幌市街地を一周する周遊歩道の設置を実現するための調査研究を目的としておりました（図18）。

その結果、小川様の話でありましたように、この左側の地図の、要するに札幌の、札幌駅、大通り公園を中心とした周囲、この緑の線で示していますけれども、約150キロのさっぽろラウンドウォーク構想ということで、このルートをも、小川様もいろいろなアドバイスとか、もう実際にエコ・ネットワークでは昔から歩かれていますので非常に参考にさせていただいて、一緒にこういうコースを今構想を立てています（図19）。

札幌というのは、もう30年以上前から、右側の地図にありますけれども、みどりの基本計画の中で環状グリーンベルト構想という構想に基づいて、200万市民が住む市街地の周囲の里山であるとか、自然歩道、石狩川の河川敷であるとか、公園緑地のネットワークを非常に充実して整備されていってまして、このさっぽろラウンドウォークもすべて公有地を歩くことによって一周できるという、札幌は素晴らしいそういう緑豊かなまちであるということがあらためてこの研究会の中で分かりまして、今、この研究会の有志によってウォークラボ札幌というNPOを設立しようということで、予定通りいけば今月設立認可

になる予定なのですが、歩くことによってその地域の魅力を再発見して、自然環境の保全であるとか地域の活性化とか観光振興であるとか、郷土学習、健康づくりに寄与できるということで、このさっぽろラウンドウォークを設定、普及、発展させるためのNPO法人を今設立したいということで、小川様たちと協力して行政の方、民間の方もこれから巻き込んで実現化していきたいと考えております。

3-3. NPO法人「ウォークラボ札幌」の設立（図20）

最後になりましたけれども、実は今この遠隔をしている会場は大学の中ではなくて、テントテン・サッポロ・ステーション(Tentoten Sapporo Station)というゲストハウスを利用させていただいております。左側の写真に写っているところが今私たちがいるところで、今お顔が映っていると思うんですけども、このテントテンの責任者の長谷川さんです。長谷川さんにお世話になってここをお借りして今、公開講座をしているわけですが、これは札幌駅から本当に歩いて5分の非常に便利なおところにある施設で、歩く滞在交流型観光の1つの拠点としてふさわしいところというふうに考えております。

もう1つは、先ほど述べましたNPO法人のウォークラボ札幌の所在地として、この住所を利用させていただくということになっておりまして、具体的に歩く観光を札幌で実現する1つの拠点としてこういうゲストハウスをこれから大いに活用することによって、要するに長期滞在につながる、ゆっくり滞在交流型の観光をしていただくというそういう動きを札幌でこれから強めていければと考えております（図21）。

先ほどのスライドと同じものですが、今日の話の環境と観光のかかわりをどう考えるかということで、小川様の最後の環境体験というキーワードは非常に重要なものではないかと。観光と環境を結び付けるもので、ホストにとってもゲストにとっても環境体験することが非常に意味のあることであろうと考えております。

4. 質疑応答

（下休場千秋） 環境保全活動とフットパスの活動を長年にわたりされてきた小川様は、このコロナ禍の今後といいますか、アフターコロナの時期にどういう観光がこれから重要になるというふうに考えられますか。

（小川巖） 一番時宜を得たご質問だと思うんですけど、一番答えるのが難しい質問じゃないですか。僕は野外に出てコロナに果たして感染するもんなのかどうか、そういうことはほとんどないんじゃないかと思っているんです。それがもし起きたらそれは空気感染で、今の飛沫感染といわれているよりもっと危険な状態のはずです。

毎日都道府県の感染者数が出ていますね。京都が意外に少ないんですね。テレビで見ると、つい何日前でも嵐山あたりごっそり観光客がいたけど、じゃあ、あれがクラスター

になるかという、野外ではそんなに心配しなくてもいいのでは、と思っています。僕は公衆衛生学者でも何でもないので、言い切ることができませんけど、北海道はその点寒くなれば家の中に閉じこもって密な状態になりがちなので、そういった違いがあるのかなと。

ですから野外を歩いている限りそういう心配は僕はしないのですが、さすが海外、道外はほとんど行きません。去年は2回道外へ行ったきりです。でも札幌市内とか道内は何十回も歩いていますよ。移動手段を地下鉄だ、汽車だ、電車だ、その中でリスクがあるかもしれないけど、外へ出てしまえば何でもないと私は思って動いていますけど。

(下休場千秋) アウトドアとか歩く環境というのは、非常に今の時期でも楽しめるということですか。

(小川巖) そうです。

(下休場千秋) 視聴者の方からいくつか質問をいただいているんですが、歩く滞在交流型観光を促進、発展する際には、コース設定もさることながら交流を生み出す仕組みづくりが欠かせないと思いますが、現時点で何か方策はあるのでしょうかという。この辺はどうでしょうか。交流を生み出す仕組みづくり。

(小川巖) それはコース次第ですね。例えば札幌市内でも、僕らは歩いて、特に秋になりますと北区の方はまだ農家が結構あります。そういうところの農作物の直販所などに立ち寄って、近所の人たちと販売している農作物を通じて、これはどうやって食べるのとか、どこへ行ったら売っているのとか、そういうささやかな交流みたいなことは札幌市内にいてもできると思うんです。

これがもう少し遠出することになると、その土地でどういうものを作っているとか、いつ採れるのかなど地元の人たちとその辺を事前にコンタクトを取って、さり気ない形でやるように心掛けてはいます。

(下休場千秋) まだ質問がありまして、テントテンはツアー参加者の方のみ利用できるんでしょうかという質問ですけれども、ここはゲストハウスとレストランがございしますので、どなたでも参加していただくようになっていると思います。

(小川巖) 直接どうですか。

(長谷川英幸) どなたでもご利用ください。

(下休場千秋) ということで、ツアー客には限りませんので。

(視聴者) ここはどういう場所なんですか。

(長谷川英幸) ここは多目的ホールで、今回のようにセミナーでご利用いただいたりとか、飲食を伴う少人数での会食パーティー、立食パーティーなんかも受け付けていますし、飲食の機能を持っているゲストハウスですので、お料理の準備とかお飲み物、酒の準備もこちらでさせていただいて、手ぶらで手軽に使っていただけるような多目的スペースになっています。

上は宿泊スペースなんですよ。上は宿泊スペースになっていますので、ぜひ宿泊をしてもらって、皆さんで談話とか懇親していただく場所として使っていただければと思います。すみません、こんな時間をいただきまして。

(小川巖) いえいえ。

(長谷川英幸) ありがとうございます。

(小川巖) 今、質問された方は昔のうちのスタッフだった人です。今は東京ではたらいしていますけど。

(下休場千秋) 次の質問なんですが、新しいフットパス、道を開くことに一生懸命であっても、その後の維持管理が中核人材の高齢化や費用などで課題になっています。道内のフットパスでの対応事例をご教授いただきたくお願いしますということですが。

(小川巖) これはどこでも付いてまわる話だと思うんですが。僕らはもう一部始めています。先ほどのサクランボの木を伐採する時もやっぱり呼び掛けに応じて参加してくれる人たちと一緒にやることにしています。フットパスについても実際に歩いた経験のある人だったらあそこはよかったから、じゃあ、自分たちで草を刈ろうとかササを刈ろうとかいう動きは出てきます。

私もそういう形で少しずつ今始めています。始め方は、歩かしてもらっていつもいい思いをさせてもらっているんで、剪定ばさみをみんなに持ってもらって道に飛び出た草とかササとか枝を切っていくというようなことをやり始めていますので、いろいろ知恵を絞ってやれるんじゃないかな。

地元の人たちだけでやろうということじゃなくて、よそからも呼び込める、誘い込めると思うんですね。それにはやっぱり、あそこのフットパスを歩いてみたいということになればいい訳です

(下休場千秋) ありがとうございます。まだいくつか質問があるんですが、時間があ

んまりなくなってきましたので、全部にお答えしてもらるのはそろそろなんですが、廃線などを利用する際の整地はどの程度までしていращやるのでしょうか。完璧なほどにしようと思環境体験効果が薄れそうですし、かといって標識を立てるだけでは事故等が起きそうなので、中間地点の定義が難しいと思いますというご質問ですが。

(小川巖) フットパスだけで考えれば、土を入れるだけで十分なところが多いんじゃないですか。ほかのところでも見えていますね。サイクリングロードにするとみんなアスファルトにしちゃいますけど、歩くだけであれば、砂利はそのまま残る場合が多いので、そこに土をかぶせる。

もっといいのは、森林ボランティアをやって間伐をした時など、それでチップを作ります。そのチップを敷くのが一番効果的だとは思っています。だから、環境ボランティアとフットパスとそこでうまくドッキングするような、そういう持っていき方もできるんじゃないかなと思います。

(下休場千秋) ありがとうございます。まだまだ質問があるんですが、時間がもう押していますので、新たに私の方から1つだけ質問をさせていただきたいんですが、次世代の若い人たちに何か伝えたいことがあればぜひお願いします。

(小川巖) 若い人に言うのであれば、実際にフットパスを歩きましょうということと、そういうボランティアと一緒にやりましょうということだと思います。一緒にやることで結構いろいろなものが見えてくるようなんですね。以前、本州の大学生20人ぐらい呼んで作業をやってもらいました。

私らはこういう方針でやるんだと言って作業をやってもらいましたが、彼らは彼らなりのやり方もあるんですね。作業をやることでそういうことに気付くわけで、私らはそういうきっかけをつくるのが役目ですから、いろいろ経験をしてもらうことで次につなげることができると思うんですね。

だからひと口に環境体験って僕は言っちゃいますけど、そういうものに一歩でも二歩でもかかわってもらえればいいなと。その次が見えてくるんじゃないかなと思いますけど。

(下休場千秋) ありがとうございます。そうしましたら時間になりましたので、これからも小川様にいろいろご指導いただきたいと思いますけれども、残念ですけれどもこれで小川様のご講演を終わりたいと思います。本日は誠に興味深い話をありがとうございました。また、ご参加いただきました視聴者の皆様方にもお礼を申し上げます。これで公開講座、「観光現場の挑戦」の第1回目を終了させていただきます。ありがとうございました。

(小川巖) どうもありがとうございました。

環境と観光

-市民活動としての環境保全とフットパス-

北海道大学観光学高等研究センター

2020年度公開講座 観光現場の挑戦

2020年12月1日（火）

エコ・ネットワーク代表 日本フットパス協会理事

フットパス・ネットワーク北海道（FNH）事務局長

（公財）北海道新聞野生生物基金評議員

小川 巖

小川 巖（おがわ いわお）

1945年 北海道松前町生まれ、2才から高校まで神奈川県横須賀市で育つ。信州大学農学部を経て1970年北海道大学大学院農学研究科入学。

1984年 北海道庁退職
野生生物情報センター設立（代表委員）

1992年 同センター解散
エコ・ネットワーク設立（代表）

（財）北海道新聞野生生物基金アドバイザー（後評議員）
2002年 フットパスフォーラム「歩く文化の国イギリスのフットパスを北海道にも」（道新野生生物基金）

全道フットパスの集い開始

2003年 全道フットパス・ネットワーク準備会発足

2009年 日本フットパス協会設立（理事）

2012年 フットパス・ネットワーク北海道（FNH）設立（事務局長）

図1 経歴

自然、環境からフットパスへの道程

■1980年代から年代別に関わったテーマを挙げると、多様なテーマに取り組んできたことが分かる。周囲からは存続できるかどうか、危ぶまれたが...

- ・バブル景気の真っ只中にあったこと。
- ・野生生物、自然への関心が高まったこと。
- ・アウトドアブームが始まったこと。

等が持ちこたえた理由として挙げられる。

■大きな流れとしては...

自然、野生生物→環境→フットパスと主要テーマが変遷してきた。

図2 エコ・ネットワークの履歴

1980年代

■所属：野生生物情報センター（1984～1992年）

■受託組織：日本野鳥の会札幌支部、さっぽろ野の花の会、野生動物写真研究会

■テーマ：

野鳥観察、鳥類調査、ヒグマ調査協力、フラワーウォッチング、植物画勉強会、動植物写真展開催、ネイチャーゲーム、カッコウキャンペーン、「おーい！北海道」キャンペーン、自然観察ガイド養成講座、バックパッキング、自然保護指導員講習会、自然に親しむ集い、野生動物の保護管理シンポ、ナチュラリスト・レポート、野生動物映画上映会、自然保護関連シンポ、ワイルドライフ・レポート発刊

■テーマ（要約）：

野生生物観察・調査、自然関連行事・各種講師、野外活動の推進

図3 1980年代

1990年代

■所属：エコ・ネットワーク（1992年～）

■受託組織：ヒグマの会、野生動物救護研究会

■テーマ：

自然（森林）遊び、どろ亀さん上映会、ワンデイウォーク、タララ大
自然塾、北海道新聞野生生物基金（1992年）、ナショナルトラスト
&ピーター・ラビットツアー（3回）、ブナウォッチングツアー（黒松内）、
週末田舎人（黒松内）、かんじぎウォーク（黒松内）、ワイルドツアー、エ
コ・ウォーキング（1992年～）、野生生物写真展、外来種問題シンポ、
海外国立公園視察（アメリカ）、フラワーソン、カミネッコン（植樹）、
フォレストクラブ（平取）、自然を生かした地域づくり

■テーマ（要約）：

自然体験→環境体験、環境・自然系団体との連携、アウトドアプロ
グラム、野生生物問題

図4 1990年代

2000年代

■所属：エコ・ネットワーク

■受託組織：全道フットパス・ネットワーク準備会

■テーマ：

海外環境研修ツアー（イギリス、デンマーク）、フットパスウォーク（札幌市内、
北海道内、日本国内）、海外フットパスツアー（イギリス、フランス、スペインほか）、海
外動物園研修ツアー（オーストラリア）、フットパスフォーラム（2002年）、
全道フットパス・ネットワーク準備会（2003年）、全道フットパスの集
い（2003年）、エコ・ウォーキング、アニマル・レスキュー研修会、ワ
イルドツアー、イギリスCAT訪問研修、一斉フットパスウォーク（全道
で秋開催）

■テーマ（要約）：

海外環境研修、野生動物救護、フットパスの展開

図5 2000年代

2010年代

■所属：エコ・ネットワーク、酪農学園大学

■受託組織：北海道カリマンタン交流協会、FNH、知床100m運動北海道支部

■テーマ：

済州島オルレウォーク、親子エコキャンプ、鹿角拾いボランティア（えりも）、森づくりボランティア（平取）、親子植樹体験（道新野生生物基金）、海外植樹ボランティア（インドネシアほか）、台湾ウォーク、札幌周回ウォーク、欧州フットパスウォーク（イギリス、ドイツほか）、日本フットパス協会（2009年）、エキノコックスベイト作戦、海外環境専門家招聘、（株）ジオ設立、札幌ラウンドウォーク研究会、フットパスの長距離化&周回化、盤溪癒しの里山プロジェクト、ワイルドサーモンフットパス、フォーラム「札幌にもフットパスを！」

■テーマ（要約）：

フットパス本格展開、環境ボランティアの多様化、海外環境専門家との交流

図6 2010年代

2020年代

■所属：エコ・ネットワーク

■受託組織：

■テーマ：

機動環境ボランティア、さっぽろ周回フットパス、新たなフットパスの創出、避災フットパス、廃線フットパス、クマの市街地侵入防止ボランティア、スズラン群生地雑草除去ボランティア、クマの市街地侵入防止果樹伐採、北大ヒグマ研50年史、盤溪癒しの里山プロジェクト、フォーラム「札幌にもフットパスを！」、さっぽろ周回ウォーク

■テーマ（要約）：

フットパスのロング化、環境ボランティアの多様化

図7 2020年代

エコ・ネットワークのポリシー

- 組織としての会員制はとらない。
- ・ **バリアーをなくす。誰でも入って来れる組織であるべき。**
- NPOを取得しない。非NPOを貫く。
- ・ **即応性を第一に考える。**
- ・ **計画、予算に縛られない。**
- ・ **他団体との連携、後押しに徹する。**
- 行政に頼らない。
- ・ **活動は奇兵隊またはゲリラ的であるべき。**

図8 エコ・ネットワークのポリシー

私たちは次のようなミッションのもと活動しています。

- ・ 自らの活動のみならず、環境や自然に関する他の活動を紹介するよう努めます。
- ・ 関連団体・組織または個人と協力して行う活動を積極的に行います。
- ・ 環境系の各分野を結びつける役割を担います。
- ・ 環境系のみならず他のジャンルとの連携にも取り組みます。
- ・ 未開拓の新しいテーマに果敢に挑戦していきます。
- ・ 市民と共に環境を考え、自然を楽しむため共に行動します。
- ・ 環境分野の人材育成を進めます。

図9 エコ・ネットワークのミッション

ミッションのもとに次のような事業を行います。

- ・ 自然を生かした地域づくりのアドバイザー
- ・ 環境セミナーの企画・開催
- ・ エコ・ウォーキングの開催
- ・ エコキャンプの企画と普及
- ・ 環境ボランティア活動の実践
- ・ フットパスづくりと普及活動
- ・ 環境・自然系の印刷物の編集と刊行
- ・ 環境体験プログラム開発
- ・ 市民参加型調査の企画・実施
- ・ 環境・自然分野に関する書籍等の展示販売

図10 エコ・ネットワークの事業

フットパスの対象と分野

フットパスがもつ奥深さと幅の広がりにより可能性を見出した。

対象:歴史、文化、自然、農、食など

分野:7Kで表すことができる。

環境	地域の自然を見直す。地域の自然の価値に気づく。自然の多様性を知る。
健康	身体的のみならず心理的（精神的）により。探求心が刺激される。
観光	知らなかったものを知る機会になる。長い時間その土地に触れあうことが可能になる。
交流	歩く人同士、土地の人とのコミュニケーションが生まれる。地域間の交流につながる。その土地の産物を知ってもらえる。買ってもらえる。
経済	地域の産物、製品を知ってもらう。消費につながる。規模は小さいながらビジネスに発展する可能性。
景観	遠景としての景観だけでなく、近景もまた大切な要素となる。
活性化	歩く人の元気を高めるとともに地域を元気にするツールになり得る。

図11 フットパスの対象と分野

滞在時間の大幅な延長が可能

- SlowでSimpleなフットパスを歩くことで大幅な滞在時間の延長ができるようになる…
- 地域の食産物との出会いや地元の人との交流が促進される。
- 観光が入り込み数で評価するのに対して、フットパスは【人・時間】で評価することができる。
- ある観光地に1,000人が訪れて1時間滞在なら1,000人・時間。
- フットパスなら50人でも5時間で250人・時間、20時間（1泊）で1,000人・時間となる意味は大きい。

図12 フットパスと地域活性化

フットパスのこれから

一つの市町村の中に1本または数本のフットパスを作ったレベルではハイキングコースと変わらない。

多様なフットパスの展開

■周回（サーキュラー）フットパス

- 札幌ラウンドウォークの開設間近か
- 京都、広島に続け！
- 道内他地域で！

■ロング（フット）パス

- まず隣町と繋ぐ越境パス（町から町へ、稚内からサハリンへ、函館から青森へ）
- 札幌から各方面へつなぐ（札幌→小樽、ニセコ・黒松内、千歳、石狩市浜益区）

■新たなフットパスの創出

- 避難フットパス（津波に備え、高台、丘陵に緊急時に使える道）
- 廃線フットパス（江差線、札沼線、日高線などをフットパス化またはサイクリングロード）
- お散歩フットパス（ウォーキング等に地元の人が利用できる短距離コース）

図13 フットパスのこれから



写真1 エゾシカの角拾いボランティア（えりも町）



写真2 牧場に落ちたエゾシカの角（えりも町）

2017年4月12日

えりも・エゾシカ角拾いボランティア 2017 のご案内

町内外の有志が牧野に散在している鹿角を拾う企画でもここだけの環境ボランティアです。鹿角は作業中のトラクターのタイヤに刺さるとパンクやバーストの原因になるからです。広大な牧野を存分に歩ける機会は一歩に増やしません。

該事項により 10 年続いたこのイベントは今回が最後になる見込みです。復活する長瀬仙蔵も本年 5 月いっぱいまで閉館の予定です。最後を飾るにふさわしい活動になると思います。

■日 程■ 2017年5月6日(土)、7日(日) ※天候により7/26に実施になる場合もございます。

5月6日
 13:00 現地集合（えりも町郷土資料館水産の館）、開会挨拶、現地説明等
 参加：長瀬仙蔵（えりも町）TEL: 01466-2-2410 長瀬の家の蔵出し（郷土資料館の蔵出し）
 13:30 採草場へ移動、角拾い
 16:30 終了後えりも町郷土資料館へ戻る
 17:00 長瀬「仙蔵」へ、休憩、入浴
 18:30 夕食・交流会

5月7日
 7:30 朝食
 8:30 出発、採草場へ移動
 11:30 終了後、郷土資料館へ、鹿角加工、昼食。
 14:00 解散

■参加費■ 12,500円（子ども（小学生以下）8,500円）
 ※1泊2食付宿泊料（1日目夕食、2日目朝食）、傷害保険料、講師料、運営費等込み

■定 員■ 20名（先着順、定員になり次第締め切ります）

■宿 泊■ 「長瀬仙蔵」TEL: 01466-3-1144 住所：長瀬町えりも町えりも町236-6

■持ち物■ 長靴、防虫剤、帽子、手袋、傘、雨具、夕飯の乾物、旅行非常食、マイ箸、飲み物

■その他■
 ・1、2日目昼食は各自でとりください。
 ・日帰りの参加はできません。
 ・雨天でも決行します。
 ・防虫剤、雨具の用意は忘れなご願ひ致します。長靴は必ずお持ち下さい。
 ・原則として現地集合・解散

主 催 ひだか楽園えりも事業所、えりも町商工会
協 力 エコネットワーク

※問合せ・お申し込みはエコネットワーク（環境市民課）まで。
 〒060-0809 札幌市中央区北9条西4丁目エムビル5F
 TEL: 011-737-7941 FAX: 011-737-9606 E-mail: eco@hokkai.or.jp
 URL: <http://city.hokkai.or.jp/~eco/>

写真3 えりも・エゾシカ角拾いボランティア募集チラシ



写真4 すずらん群生地（平取町）



写真5 スズラン群生地の環境ボランティア活動（平取町）

2017年8月17日

エコ・ネットワークがやる市民参加型環境ボランティア
平取町スズラン群生地の侵入雑草を抜き取る

日高管内平取町栗倉(めむ)地区には日本一の規模を誇る15haのスズラン群生地があります。6月末から8月上旬にはたくさんの人が集まりに訪れます。ところが近年、ヨモギ、カラマツソウ、ササ、ススキなどが侵入するようになり、スズランが全体的に衰退傾向にあるとされています。

私たちは7月以降2回に分けて、これら目立つ雑草の抜き取りを行っています。第3回目になる今回は、さらに徹底した抜き取り作業をする予定です。もとより広大な群生地の一部に過ぎませんが、来年に向けての実験的な取り組みと考えています。国内最大と言われるスズラン群生地を長続きさせるための環境ボランティアに力を貸してください。

■主 催 ■ エコ・ネットワーク（環境市民団体） ■後 援 ■ 平取町

■資 格 ■ 年齢・経験問いません

■作業内容 ■ 群生地に繁殖している雑草（ヨモギ、カラマツソウ等）を抜き取り。

■日 時 ■ 2017年9月25日（月）作業時間 10：00～15：00

■集 合 ■ 9：30（原則として現地集合） 平取町本町「ふれあいセンター」駐車場

■参 加 費 ■ 1,000円（材料費、通信費、傷害保険料等に充当）

■定 員 ■ 15名（先着順）

■持 ち 物 ■ 野外作業に適した服装、昼食、飲み物、帽子、飲み物（作業中は現地で用意）

■そ の 他 ■ ・小雨程度であれば実施します。
 ・主催者の使用車に数名乗車可能です。
 ・お申し込みの際住所、氏名、年齢、電話番号をお知らせ願います。

お問い合わせ・お申し込みはエコ・ネットワーク（環境市民団体）まで。
 〒060-0809 札幌市北区北9条西4丁目エールビル8F
 TEL：011-737-7841 FAX：011-737-9606 E-mail：eco@hokkai.or.jp
 WEB：http://city.hokkai.or.jp/~eco/

写真6 スズラン群生地の環境ボランティア活動募集チラシ



写真7 盤溪癒しの里山プロジェクト、植樹（札幌市）

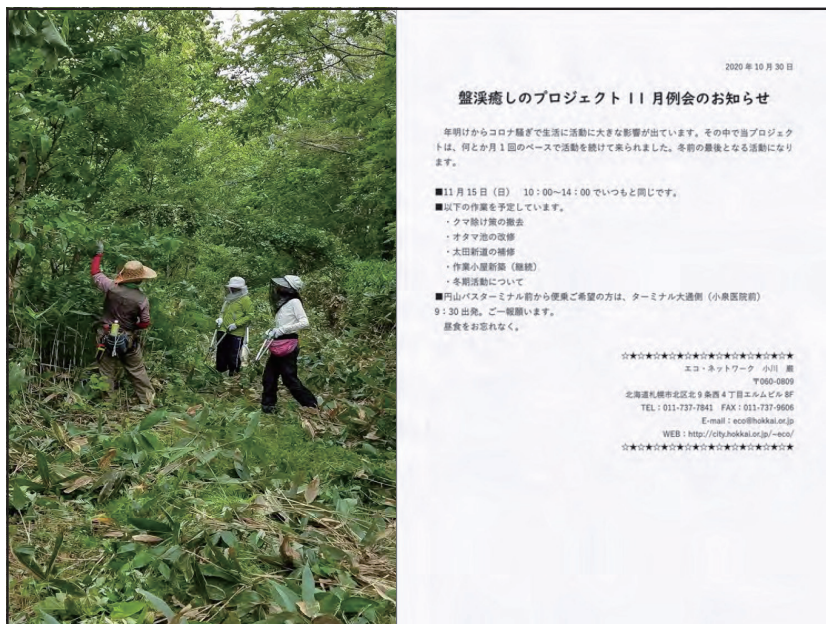


写真8 盤溪癒しの里山プロジェクト、山道作り（札幌市）



写真9 ヒグマ出没対策の環境ボランティア活動（札幌市）

2020年6月8日

クマが市街地に侵入するのを防止するための環境ボランティア

毎年、札幌の一部地区や道庁の森からヒグマが市街地に現れるようになり、その被害騒ぎとなることが繰り返されてきました。住宅地と森林が隣接している場所が多い札幌の特殊性も関係しているようです。

クマの市街地への侵入を防止するには、クマが移動経路として利用する場所の草刈りと好物であるサクランボ、ナシ等の放棄果樹の伐採が非常に有効であることが実証されつつあります。

そこで2種類の作業を環境ボランティアの一環として実施します。現在コロナ禍のため行動に制約がある状況ではありますが、関心のある市民、住民の皆さんのご参加をお待ちしています。

■作業区 ■①道に中小河川沿いの草刈り ②放棄果樹の伐採と枝条処理

■場所 ■札幌市南区緑野・廣敷地区を中心としたエリア

■時期 ■①6月26日（金）②6月17日（木）、20日（土）※7月及び8月以降にも実施します。

■参加費 ■無料 ■定員 ■各回10名程度

■主催 ■エコ・ネットワーク（環境市民団体） 株式会社環境保全 EnVision 環境保全事務所

■協力 ■札幌市

■申込方法 ■

- ・まずエコ・ネットワークへお問い合わせください。
- ・車刈り、枝条処理のどちらかを選んでいただきます。両方でも構いません。
- ・それぞれの集合場所等についてお知らせします。
- ・作業時間はおおむね8:30～13:30頃を予定しています。

■その他 ■

- ・原則として現地集合・解散です。昼食は各自持参です。
- ・作業用の道具は主催者が用意（持ち込み可）。
- ・新型コロナウイルス感染拡大防止対策は各自行っていただきます。
- ・雨天の場合090-2773-2038 または 011-581-2038（小川組）へお問い合わせください。

この活動は北洋銀行の「はっくー基金」の助成を受けて実施します。

お問い合わせ・お申込みはエコ・ネットワーク（環境市民団体）まで。
 〒060-0609 札幌市北区北5条西4丁目7-4 エムビル8階
 TEL: 011-737-7843 FAX: 011-737-9006 E-mail: eco@hokkai.or.jp
 URL: <http://econetnetwork.jp/>

写真10 ヒグマ対策ボランティア、サクランボの伐採（札幌市）

-32-



写真11 フットパスコースから市街地を望む（黒松内町）

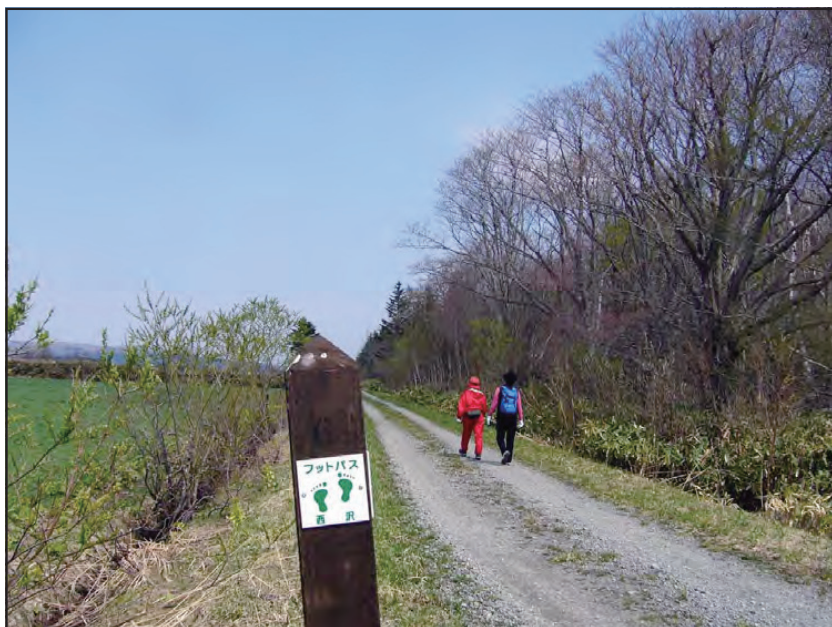


写真12 フットパスとコースサイン（黒松内町）



写真13 歌オブナ林に至るフットパス（黒松内町）



写真14 ススキとササを刈り取ったフットパス（黒松内町）



写真15 「黒松内町特産物手づくり加工センター（トワ・ヴェール）」での昼食



写真16 地元産品を食材としたランチ



写真17 サケが遡上するウヨロ川フットパスのコース（白老町）



写真18 小樽海岸自然探勝路（小樽市）

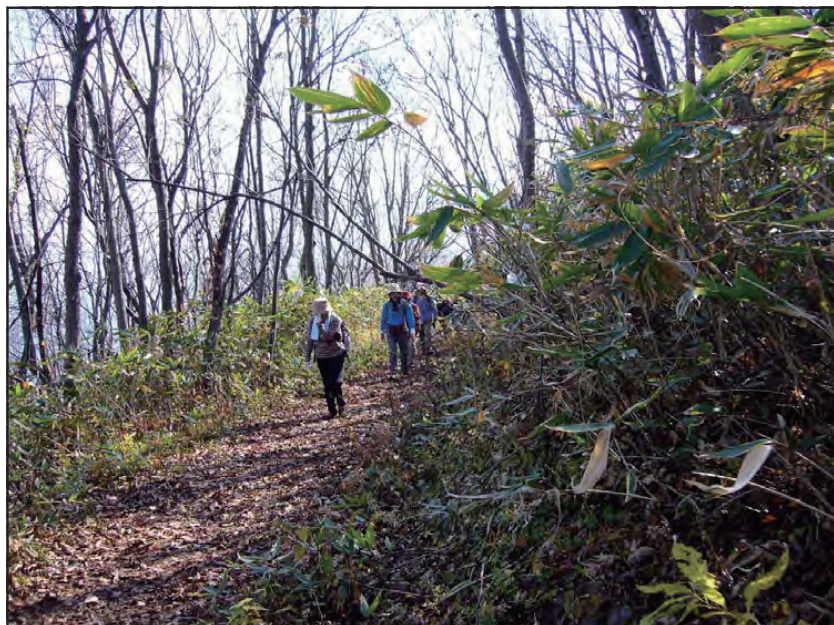


写真19 赤岩オタモイ線歩道（小樽市）

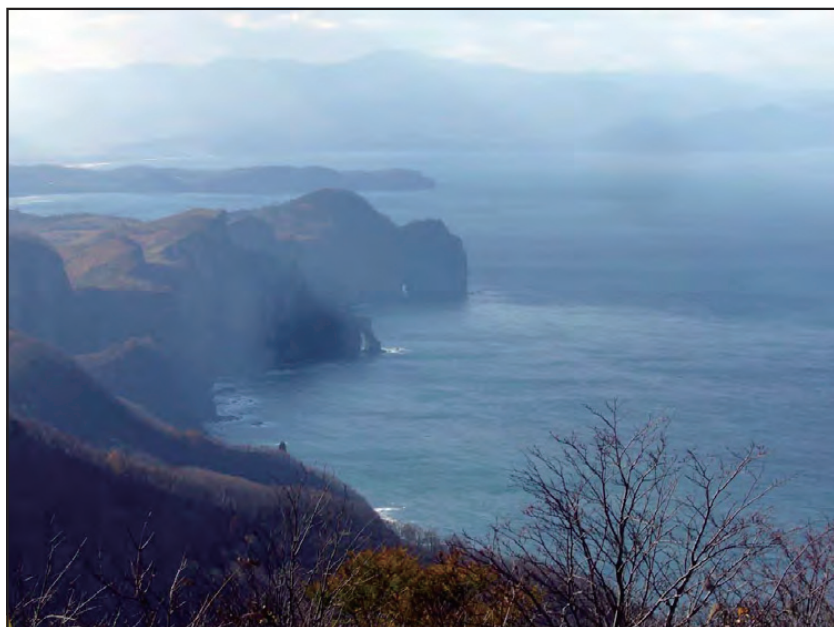


写真20 赤岩山から積丹半島を望む（小樽市）



写真21 田園地帯のフットパスを歩く（上富良野町）



写真22 旧狩勝線を利用した廃線フットパス（新得町）



写真23 共働学舎におけるフットパスでの地域交流（新得町）



写真24 心地よい木道のフットパス（共和町）



写真25 神仙沼のフットパスコース（共和町）



写真26 フットパスの標識（イギリス）



写真27 コーンウォール半島のフットパス（イギリス）



写真28 放牧地のフットパス（ヘブデンブリッジ）



写真29 済州オルレ（韓国）



写真30 済州オルレ（韓国）



写真31 オルレコース途中に設けられた記念スタンプ台



写真32 済州オルレのシンボル「カンセ（原生馬）」の道標

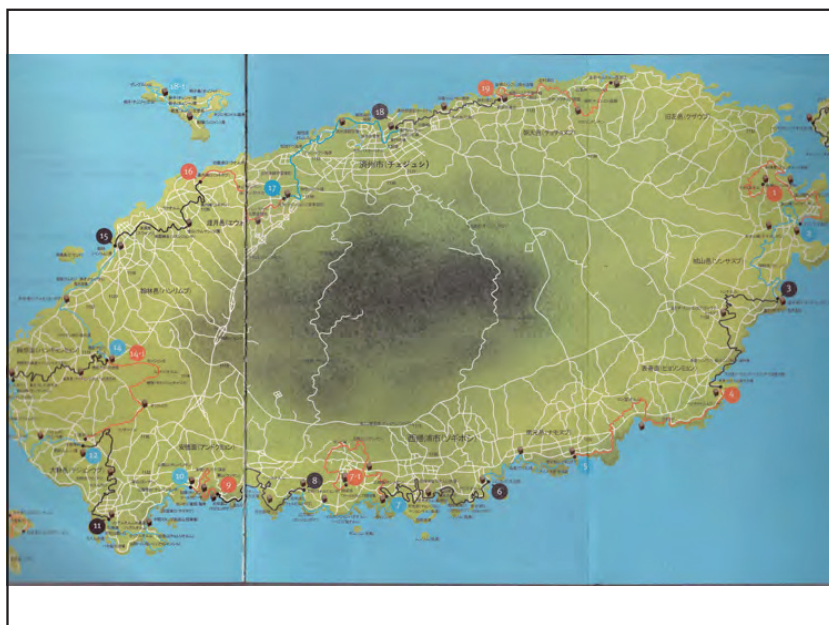


写真33 済州島を一周する延長425kmの済州オルレ

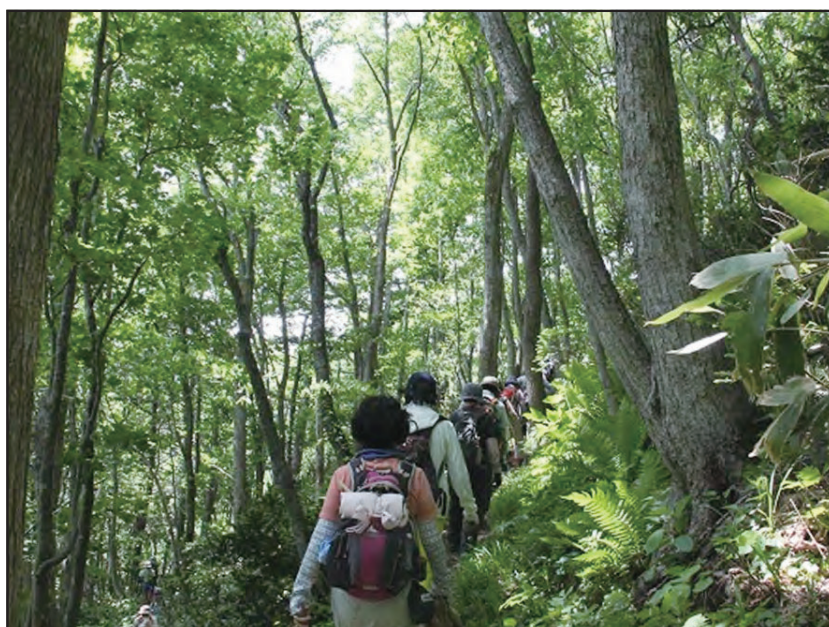


写真34 札幌周辺自然歩道（札幌市）



写真35 藻岩山スキー場を下る（札幌市）



写真36 札幌周辺自然歩道のコースサイン（札幌市）

まとめ 私にとっての観光とは？

エコ・ネットワークでは1992年以来、環境、自然に関する様々な取り組みをしてきた。私はそれらを**環境体験**と称している。

フットパスも環境ボランティアも環境体験であるが、それを観光と結びつけることは可能であろう。

それによって新しい展開につながると考える。

図14 まとめ 私にとっての観光とは

○どのように「**環境体験**」と観光を結びつけるのか。

- ホスト（地域住民、生活者）の**環境体験** ➡ 故郷への愛着心の醸成
- ゲスト（観光客、消費者）の**環境体験** ➡ 「モノ」から「コト」へ
- ホストとゲストを結びつける「道草をしたくなるような歩く道」づくり ➡ 「歩く滞在交流型観光」の実現

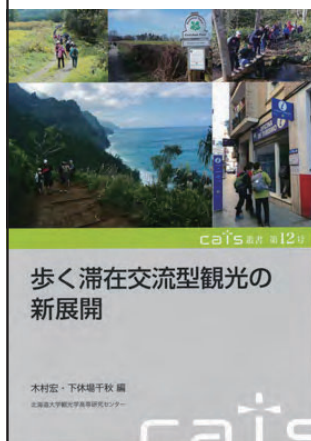
図15 環境体験と観光

○ CATS観光創造研究会 「歩く滞在交流型観光の新展開」 2018年3月開催

- 開催趣旨
- 歩く旅のあり方を軸として、地域の自律的、持続的な発展を目指す滞在交流型観光の今後の展開について、国内外のオルレ、フットパス、ロングトレイル、聖地巡礼に関する民産官学の専門家による研究発表と事例報告に基づき議論を深め、歩く滞在交流型観光の新たな可能性を明らかにする。

図16 CATS観光創造研究会「歩く滞在交流型観光の新展開」

○ 歩く滞在交流型観光の事例研究

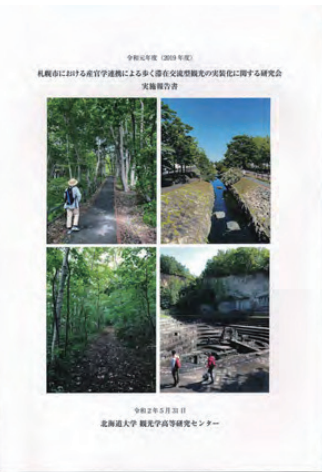


- ロングトレイル(信越トレイル、みちのく潮風トレイル、九州自然歩道)
- フットパス(イギリス、日本各地)
- オルレ(濟州島、九州、宮城)
- 聖地巡礼(サンティアゴ巡礼、四国遍路、熊野古道)
- まち歩き(佐世保時旅、水郷柳川ゆるり旅)

図17 歩く滞在交流型観光の事例研究

「札幌市における産官学連携による歩く滞在交流型観光の実装化に関する研究会」

(2019年度～)



市民の健康志向の高まりや、自然趣向、旅行形態の多様化を背景に、「歩く」ことをテーマとした札幌の観光まちづくりの実現を目指し、札幌市街地を一周する周遊歩道の設置を実現するための調査研究

図18 札幌市におけ産官学連携による歩く滞在交流型観光の実装化に関する研究会

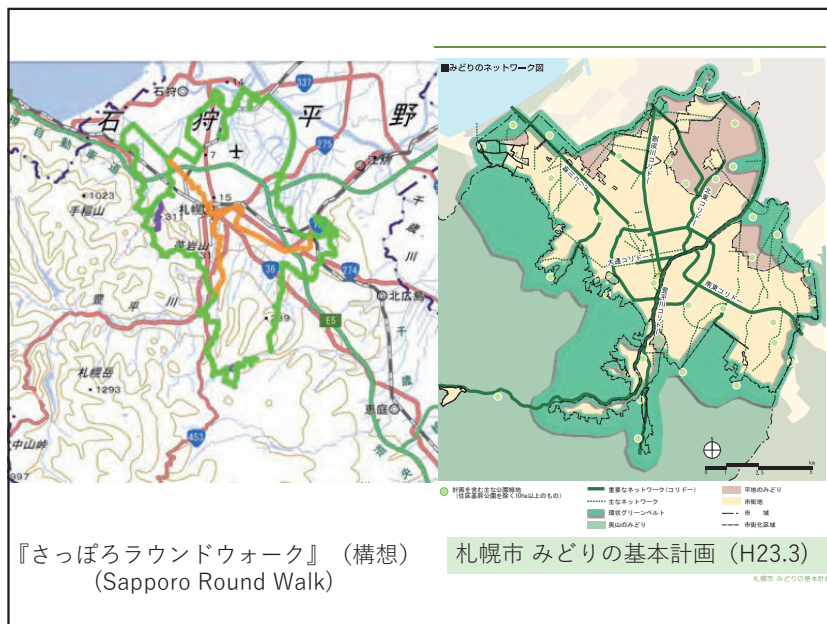


図19 「さっぽろラウンドウォーク構想」と「札幌市環状グリーンベルト構想」

特定非営利活動法人『ウォークラボ札幌』

設立趣旨

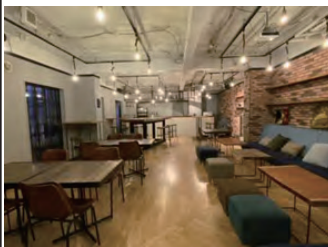
2020年12月設立予定

歩くことは、先人によって築かれたまちなみ、歴史や文化、自然など世界に誇れる財産を再発見、再認識するとともに、自然環境の保全、地域の活性化、観光振興、郷土学習、健康づくりに寄与することができます。

札幌において歩くことの楽しみを広め、新たな交流を生むことを実現するため、健康・環境・観光・交流・景観をテーマとした周遊歩道「さっぽろラウンドウォーク」を設定、普及、発展させ、歩く文化を醸成していくことを目的としてNPO 法人を設立いたします。

図20 特定非営利活動法人「ウォークラボ札幌」設立趣旨

テント テン 札幌ステーション
(Ten to Ten Sapporo Station)
Hostel and Kitchen
札幌市北区北6条西8丁目3-4



- 歩く滞在交流型観光の一つの拠点
- NPO法人「ウォークラボ札幌」の所在地

図21 NPO所在地、民泊レストラン「テントテン札幌ステーション」

